

禪の国際化と私の役割

大菩薩山僧堂にて安居中　バシユール・ルース淨信

(フランス)

禪の国際化について話すには、しばしばいわれている禪についての見解を簡単ながら考察し、何が禪ではないかということ定義する必要があるだろう。

禪は、仏陀の教えを伝える全く日本的な形態である、ヨーロッパではたびたび言われ、又、日本でもしばしば聞かされる。そうだとすれば、われわれ日本人ではない者にとつては、永久に近づくことが出来ないものであろう。何故なら、文化・言語・社会の進展等すべてがわれわれを日本から遠ざげるからである。従つて、日本人

ゆえに当然知っている者が一方にあれば、他方に西洋人があることになる。この西洋人の中には、又、二つの異なる姿勢がある。一つは、こういった東洋的な神秘的な信仰を先験的に拒絶するといったものであり、もう一つは、自身に得心がゆかず、自分達の生活にも不満を持ち、異国情緒を求め、はつきりとつかめぬ神秘性にひかれて、新しい感動を求めようというものである。

正に、そこには、禪について話し合うどころか「私は知っているのだ」という「私」と「知

りたいとも思わない”という“私”の相對立する“エゴ”の戦いがあるのみなのである。マハーキヤンヤパ（摩訶迦葉）の静かなる笑みからは程遠いところにあるのだ。

中国の師は言っている。“私が食べる時私は食べ、私が眠る時私は眠る”と。ではその“私”とは誰なのか？ 勿論、それは、もはや、中国人でもなければ日本人でもアメリカ人でもない。ただ、食べるという行為であり、眠るという行為そのものなのである。そこには、文化の相違はなく、個人は存在しないのだ。スンニヤータ（空ということわり）があるのみなのだ。

“全てを棄てて観よ”（道元禪師）

現代世界は國際的である。飛行機やあらゆる伝達手段が町と町、国と国の境界線をなくし、地球の反対側に住む人々のことについても知らないことはないというところまで来ている。過去の世紀に於いては、“進歩思想”の人達は自分

以外の者、外国人、未知の人々への無理解が、戦争や紛糾の原因となる人種差別や、嫌悪の情をひき起こすと考えた。だが、現代社会ではどうであろうか？ 無理解、不信の念は減少するどころか増大する一方であり、戦いや不和は、静まるどころか世界のあちらこちらで発生している。相互扶助依存の必要性を認識する代わりに、皆が政府も国家もそれぞれ自分の利益の為に争い合っている。思うに、今、ここでこそ、禅への、仏教への真の理解が、国や人種の差別をこえて、人類を救うことになるのではないだろうか。

仏教は、盲人と象の話のように、私達の見解は常に相対的なものであり、限界があるという事を教えてくれる。絶対的判断を下すことはわれわれには不可能であり、絶対的に誤ったこと、正しいことはないといわれわれが気がつくに至つたら、多くの緊張状態が緩和され、互いを受容

する事ができるようになるだろう。一言でいうならば、寛容の世界に生きる事ができるようになろう。

一方、人皆多かれ少なかれ目を被うちりをかぶっているのだと心得て、自分自身の無知の結果苦しんだり、又他人を苦しませたりする事もあるのだと認識する事により、自分の生まれや知能から来る優越心など関係なく、他人をより一層の惻隱の情を持って眺める事ができるようになるだろう。

「エゴ」を失くそうと努め、少なくともエゴのもつ不自然な性格をみとめ、その貪欲なことを自覚したら、あらゆる人々の内に、仏性を見出すことができよう。何故ならば、未だ生まれぬ者、成らざる者、作られざる者、完成されざる者がいるのであり、(さもなければ)、生まれ、成長し、作られ、完成された者以外には、出口もないのだから……」



とにかく、仏陀、目覚めたる者は、四聖諦 (Nobles Verites) の初めに「一切は苦である」とわれわれの状況を明確に表明されている。確かに一体誰が「私は苦しみを知らないし、又決して知ることもない」といい切ることができるだろうか？ 人類の歴史の中で、一世紀たりとも、又一国たりとも苦しみから免れたことがあったらどうか？ 現代社会に於いて、幾人かの欲望の充足は多くの人々の貧困により支えられている。漠然とながら、私達は、少なくとも物質的には特典を与えられているとは解っている。そうはいうものの、あらゆる便利な品物に囲まれ、豊かで安楽に過ごしてはいても、その生活の中に苦しみはひそんでいる。誰であらうとも、何処にしようとも、人生は同じように展開するのだ。すなわち、誕生、苦しみ、病い、老いそして死という風に。

仏陀のあわれみは、この苦しみの世界の彼岸

へと私達を導いてくださるのだ。

誰にでも可能な道が、誰にでも開かれている、と彼は断言してくださっている。私達の努力次第なのである。その道に達した時、私達も又、「目覚めたる者」になれるのだ。道は時には長くつらい。しかし、長くてつらいと感じることの人生なんてあるだろうか？

私達は、私対彼等、日本人対西洋人、正対誤といった、苦しみをひき起こすあの勝手な対立を設けるのは止める事ができる。とはいえそれは先ず一つの犠牲を強いるのだ。すなわち、個人的見解をすて、選り分けることを中止し、世界を先入観を持って眺めることを止めねばならない。その為に、道元禪師は、一つの鍵を私達に与える。それは、彼の師によつて絶えずくり返された言葉であり、或る夜、坐禅の最中、突如、彼が会得したことである。「身心脱落」と。

私達、日本人であれ、西洋人であれ、私達の

体と精神を全く投げ棄てたら、何が残るだろうか？ 多分、禪の真理があり、あらゆる人々を思いやる、過去の判断力や教養から全く解き放たれた真の「私」であろう。それは、時間と空間を超えて、しかしながら今、ここに深く禪を組んで、呼吸法に集中している。富める者にも、貧しき者にも、老いも若きも苦しみを感じるように、自由とあわれみのメッセージも全ての人の耳に達し、体験され得るのだ。「坐禪を組む」とは、私達の本来の姿に戻ることである」

私にとって、禪との出会いは、先ず、坐禪との出会いであった。私が、この禪の教えの国際化で担える役割を述べる前に、今日までの私の歩みをお話するのをお許しいただきたい。

私はパリに住んで働いていたが、三十三歳の時、初めて坐禪を組んだのである。仏教と禪に関する本を読んだ私は、好奇心から、弟子丸師の築かれた道場に足を運んだ。やがて少しずつ、

この新しい人生の広がりについてウエイトを置きたいと思うようになっていった。長いこと迷った果てに、やっとしつかりと大地に足をつけられる場所に辿り着いたような思いだった。幾度か接心に参加し、僧侶とも会い、彼等の話を聴いているうちに、ほとんど無意識のうちに、フランスを出て、仕事をやめ、友と別れ寺院に生活し禪の知識を深めたいと決心するに至った。他の事は、これに比べれば少しも重要とは思われなかった。

東京で数カ月暮らしているうちに、坐禪三昧の質素な生活をしている小さな寺が山深くにあると知った。そこに私は三年前から寝起きし、私の師である森山老師の手で僧の許しを得た。

ところで、ここで、国際主義の命題を立証すると思われるので、「僧侶」の語源についてちょっと述べたいと思う。「僧侶」とはパーリー語では「ビク」と呼ばれ、物乞いをする者という意



味であり、日本語では出家、すなわち家を離れた者を意味する。この二つの言葉には、従って、所有権、財産の放棄といった観念がある。これは物質的な意味に止まらず、僧にはもはや、足の地面はなく、サンガ以外の共同体はなく、個人的な意見も私的生活も放棄した者なのである。

「道にさえぎられた地点に到達すると、完全なる光明がある。目覚めにふさがれた者の内には、完璧なる実現がある（行を迷中に立てて、証を覚前に獲る）」（学道用心集より）

私と日本の出会いは非常に強烈でありかつ困難をきたした。滞日一年目、新しい環境に順応しようとしている時、しばしば、次の疑問が頭に浮かんだ。どうして日本の文化と真の禪を区別するのか？ 答えはなかなか見付からなかった。私の知性を精一杯働かしては、分類したり比較したりしてみたが、ますます混乱するばかり

りであった。やがて、質問の仕方が悪いのだと気付いたが、満足のゆく形は見つからなかった。昨冬、老師は私を、禪センターを訪問するようにアメリカへ派遣してくださった。そこで、私は、二度目の文化ショックを受けたのである。

日本に馴れてしまっていた私が、新しい言語を話す、新しい考え方と新しい行動方法を有する、新しい社会環境に又一度置かれたのである。でも、日本人もアメリカ人もフランス人も、皆一緒になって、水と牛乳のようにまじり合い相和して「道」を歩む事ができたのである。一つの国、もう一つの国、二つの大洋、にもかかわらず共通する道を。

「谷のこだまは、その大きな声より生まれ山々の形はその真の姿以外の何物でもない」
「谿声は、便ち是れ広長舌、山色は、清浄身に非るはなし。
禪は抽象的な事柄で説明されるものではない。日々の生活であり、今私がいる場所なのだ。

禪は空気中で生き、米やパンと一緒にそしゃくされるものである。知的な作り物ではなく、現実そのものであり、私達の生活に、今、ここに生きているものなのだ。西洋社会は主知主義のもとにくず折れんばかりであり、人は皆うまい言いまわしを好み、それを理解しようとする。しかし、禪の境地には徹底的に捨てることなくしては至ることができないのだ。

そこで、私は、人々に、寺であれ庵であれ、一つの場所を提供し、この現実立ち戻る一時を与えることができたかと願うのだ。大学や学校で学ぶような言葉ではなく、自分自身に戻れる場所を、テレビを眺めながら又、他の事を考えながら食物を詰めこむのではなく、真に食べられる場所を、そして心安らかにぐっすり眠れる場所を。新しい知識を得るのではなく経験や学問によって得た事を全て忘れる機会を得る場所を、そして、終には、眼を水平にし、

鼻を垂直に、何ら特別のもののない世界を生き始められる場所を……

時間や空間を通して、菩薩の道を通った先人達に又、この人生で私と共にある人々に、心からの感謝の念をささげたい。それに、また、その為に、私は全ての人々とこの道程を頌ちあいたい。

もし私がフランスへ戻るとすれば、西洋社会に、ますます強く精神的源泉——全人類の共通の遺産である——の希求があるからであり、それに又、ダルマカーヤ（法身）は、常に何処にも偏在していると私が理解しているからである。こうして、般若心経の最後の言葉が実現するだろう。

「羯諦羯諦、往きて往きて彼岸に到達せよ皆うちそろいて……」

フランス語訳 小野けい子

（来春より南仏に禅堂を開単の予定です）